

派遣者番号	R4K23	氏名	村松 香苗
研究主題 —副主題—	話し合い活動を通じた文学的文章における深い読みについて		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	中村 純子
所属	豊島区立千登世橋中学校	所属長	小林 豊茂

キーワード：読むこと 話し合い活動 文学的文章 対話 協働学習

**要旨：**文学的文章における「読むこと」の深まりについて、そして話し合い活動を通じて読みの深まりはどう変容していくか、先行研究や授業実践を基に研究を行っている。

認知心理学や学習科学の理論から、学習を促進する要素「メタ認知」「内化と外化」「外的リソースの活用」の三つが対話により可能となる「協働学習」の有用性を明らかにした。また文学的文章の深い読みとは何かを検討した結果、文学的文章における深い「読み」の段階について、「①批判的に読み、自分自身で評価して読み浸る。②多面的・多角的に教材を解釈して読む。③知識や経験と関連付けて、教材の世界と往還して読む。」の三段階であると整理した。これらの基礎研究を基に行った授業実践では、「問いづくり」や「問題解決学習」といった協働学習を指導の工夫として取り入れることで、読みの深まりの段階や自己内対話の重要性が確認できた。

# 話し合い活動を通じた文学的文章における深い読みについて

村松 香苗

## 1 問題の所在と研究の目的

PISA 調査 (2018) や令和 3, 4 年度全国学力・学習状況調査の結果並びに文学的文章の「読むこと」の授業から、課題を検討した。調査結果から共通して、「解釈」や「関連付け」, 「根拠をもとに読むこと」ができていないことが「読むこと」における問題であると整理した。また授業において、言語活動を重視するあまり「内省」する時間が疎かになっている点, 「教訓」や解釈を読み取る授業になることで批判的な読みができていない点が明らかとなった。現行の学習指導要領では、学習で培った力や知識を転移し活用する中で、自身の見方・考え方を深める必要性が求められている。これらの結果から、批判・吟味だけでなく、あらゆる異なる事柄を関連付け、現実生きる社会や世界に迫ることが、国語科教育では求められていることが明らかとなった。

これまで自身の文学的文章の「読むこと」の授業において、話し合い活動を取り入れる意義を検討してきた。話し合い活動が読みの深まりに大きく影響していると考えている。文学的文章における「読むこと」の深まりについて、そして話し合い活動により読みの深まりはどう変容するのか、話し合い活動を軸にした指導法を確立させたいと考え、本研究を行った。

## 2 研究の方法

基礎研究	授業実践	成果の分析
<ul style="list-style-type: none"> <li>認知心理学や学習科学から学習を促進・深化する要素を検討</li> <li>「協働学習」の意義と効果の検討</li> <li>文学的文章における読みの深まりの研究</li> <li>「問いづくり」の研究</li> <li>ICT 機器の活用方略の検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「形 (菊池寛)」 (光村・中 2) で授業実践</li> <li>指導の工夫の検証 (①「指導過程モデル (図 1 参照)」, ②「問いづくり」, 「問題解決学習」による協働学習, ③「ICT と紙媒体の併用」)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒記述, アンケート, 協働学習における発話, プレテスト等の分析</li> <li>本研究の成果と課題の検討</li> </ul>

## 3 研究の成果と課題

### (1) 先行研究より

認知心理学や学習科学の理論から、対話的な活動において、学習を促進する要素「①メタ認知, ②内化と外化, ③外的リソースの活用」の三つが重要であり、これら三つの要素が学習や理解の深さに繋がると示唆を得ることができた。また対話的な活動を行う「協働学習」の有効性を確認した。また「読むこと」において、吉田 (2010) や梶田 (2014) の論より、「解釈」「評価」「批評」「自分に活かす」といった高次の活動が深い読みの水準であると分かった。

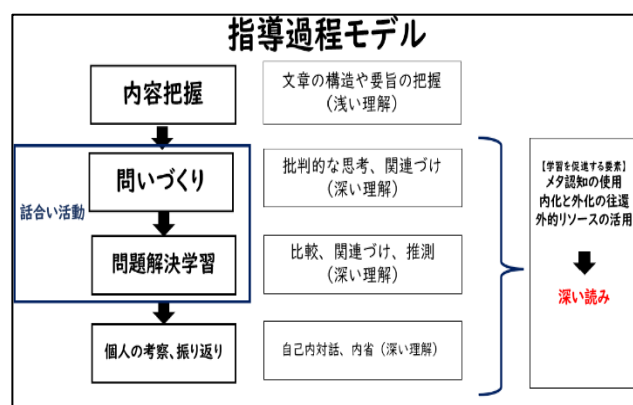


図 1 指導過程モデル

た。ここから文学的文章における深い「読み」の段階について、「①「なぜ～なのか。」と批判的に読み、自分自身で評価して読み浸る。②「他に異なる考えはないか」と一元的な読みではない、多面的・多角的に教材を解釈して読む。③知識や経験と関連付けて、教材の世界と往還して読む。」の三段階であると仮定し、整理した。これらの論より、図 1「指導過程

モデル」を作成し、指導の工夫（2 研究の方法参照）を取り入れ授業実践を行った。

## （2）授業実践より

### 【成果 1】段階的な指導による読みの深まり

図 1「指導過程モデル」の「問いづくり」から「問題解決学習」、「最適解づくり」と段階的な活動により、読みの深まりが起りやすくなることが明らかとなった。さらに個人での「最適解づくり」や自由記述による内省や自己内対話により、自己の読みを確立している学習者が多く見られた。話し合い活動は自己内対話を活発にするための好機になり得る。また指導の段階を重ねるごとに、「要旨を捉える」「表現・描写などに着目する」「推測する」といった教材に即した読みから、「疑問を持つ」「解釈する」といった根拠や理由が明確となった読み、最後にこれまでの読みを自己の知識や経験と関連付けた「自己に活かす」読みへと変容していった。

### 【成果 2】対話による読みの深まりの構造—自己内対話の活性化

話し合い活動を通じた読みでは、初めに学習者と教材間の対話が行われ、その後、話し合い活動など教室の中における談話により他者との対話が起る。この間、自己との対話が絶えず行われている状態であると言える。これらの対話が繰り返し起ることで深い読みに繋がると考えられる。また、第四段階の内省、自己内対話の授業における読みにおいて、高次の読みの活動が最も多く見られたこと、自己と関連付けて読み、自身の生きる世界に拡散する読みが起っていたことから、自己内対話が読みの深まりに与える重要性が確認できた。

### 【成果 3】ICT と紙媒体の使い分けによる話し合い活動の促進

今回の実践では、ICT 機器の活用は「拡散」をする際の外的リソースとして有効であるのに対し、紙媒体の利用は「収束」をする際に効果的であることが分かった。話し合い活動における「拡散—収束」では、二つの媒体を活用することでより円滑な活動を行うことができることが明らかとなった。

### 【課題】知識量や考えの豊かさ、言語技術による意見の深まり差

指導の段階を経ても、その授業だけでは生徒自身が持っている知識量の考えの豊かさには差があり、読みが深まったとは言えない生徒もいた。同様に「読みの方略」や言語技術が不十分である場合、話し合い活動の効果はあまり期待できないことが分かった。読みの深まりには、生徒の知識を増やし多様な考え方を知ること、方略や言語技術をある程度獲得しておくことが必須であり、「知識・技能」を獲得、転移する授業を普段から積み重ね行っていく必要がある。

## 4 まとめ

読みの深まりには、読みの段階に応じた話し合い活動や対話的な活動（教材、自己、他者との対話）を設計することが必要であり、それをもとに単元や授業をデザインしていくことの重要性が明らかとなった。しかし「読むこと」における質的な形成的評価や、「自立した読者を育成」するための系統的な指導の検討が課題として挙げられた。評価や系統性を踏まえた「指導過程モデル」へと修正することが、次の研究への課題として求められる。

## 5 主な参考文献

吉田新一郎（2010）『「読む力」はこうしてつける』新評論

梶田叡一（2014）『教育フォーラム 53 文学が育てる言葉の力 文学教材を用いた指導をどうするか』株式会社金子書房